２.長岡京跡右京第1031次（7ANKSM-17地区）・開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告

１．はじめに

今回の調査は、京都府建設交通部が実施する平成23年度都市計画道路御陵山崎線地方道路交付金（街路）事業に先立ち、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は長岡京市開田地内に所在し、長岡京跡右京六条一坊十六町（新条坊）に相当する。また、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、平安時代から近世にわたる集落遺跡である開田遺跡及び古墳時代中期から後期の古墳が展開する開田古墳群の範囲内にも含まれている。

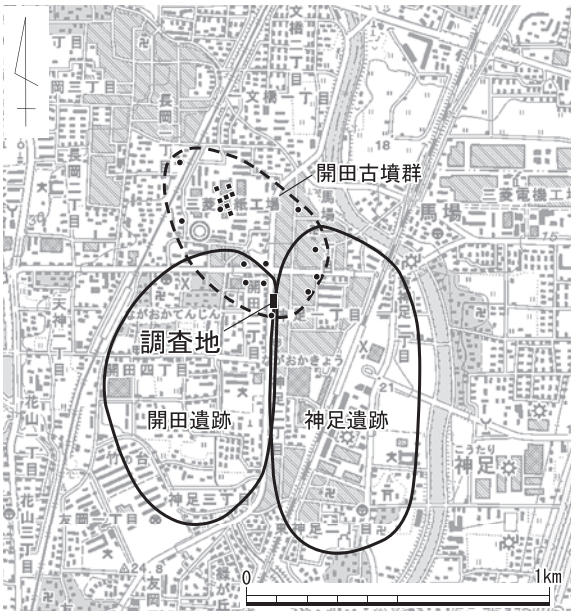
当調査研究センターでは、同事業に関連して右京第750次[注1]・第781次[注2]・第863次[注3]・第995次調査[注4]を実施している。これまでに、弥生時代の成果として中期の方形周溝墓を検出し、神足遺跡の墓域の広がりを考察する資料を得ている。長岡京跡に伴う成果としては条坊側溝を検出しており、その他に、南北総延長130mに及ぶ中世の堀跡等も検出している。今回の調査地点の南側隣接地で実施した第995次調査では、一辺約12mを測る方墳を１基検出しており、墳丘及び埋葬施設はすでに削平されて残存していなかったが、周溝内から古墳時代中期の遺物が出土している。検出地点は開田古墳群の範囲に含まれており、南側に散在する一群は東羅支群と捉えられている。国土座標は、既往の調査成果との整合性を図るため日本測地系（第Ⅵ座標系）を使用している。土層の注記には『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を用いた。

現地調査に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会並びに財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの御指導・御助言をいただいた。

また、地元開田区に御高配を賜った。記して感謝します。なお、調査に係る経費は、京都府乙訓土木事務所が全額負担した。

［調査体制等］

現地調査責任者	調査第２課長 水谷壽克
調査担当者	調査第２課調査第２係長 岩松　保 同　調査員　奈良康正
調査場所	長岡京市開田２丁目
現地調査期間	平成23年10月24日 ～11月25日
調査面積	120㎡



第１図　調査地周辺主要遺跡配置図
（国土地理院　1/25,000　京都西南部）

２．調査成果

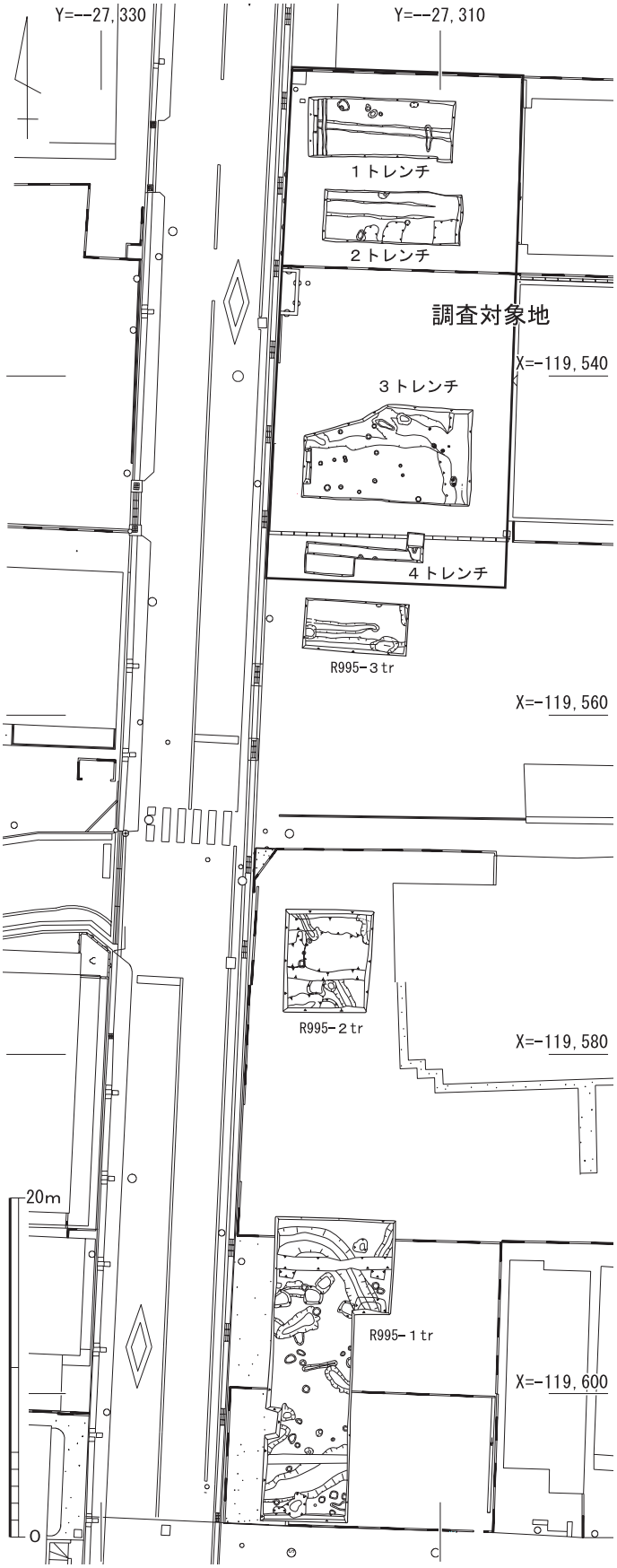
今回の調査は、府道拡幅工事に先立って実施することとなったが、調査対象地内には上下水道、ガス管等が埋設されていることから、調査区を分割して設定することとなった。

調査区は北から１～４トレンチとした（第２図）。現標高は19.5～20ｍを測り、北から南へと緩やかに下がる傾斜となっている。

（１）１トレンチ（第３・４図）

調査対象地の北端に設定した。調査面積は31㎡である。過去に行われた宅地造成の際になされたと考えられる攪乱と既存施設の撤去工事による攪乱が激しく、第１～４層までがそれらに伴う埋土である。その下層で確認した第５層の灰黄褐色砂質土は、今回の調査対象地全体で確認でき、近世以降の遺物を僅かに含んでいた。この下層が地山面となり、遺構はこの面で検出した。調査は重機により第５層までを除去した後、人力により遺構精査を行い、その検出に努めた。

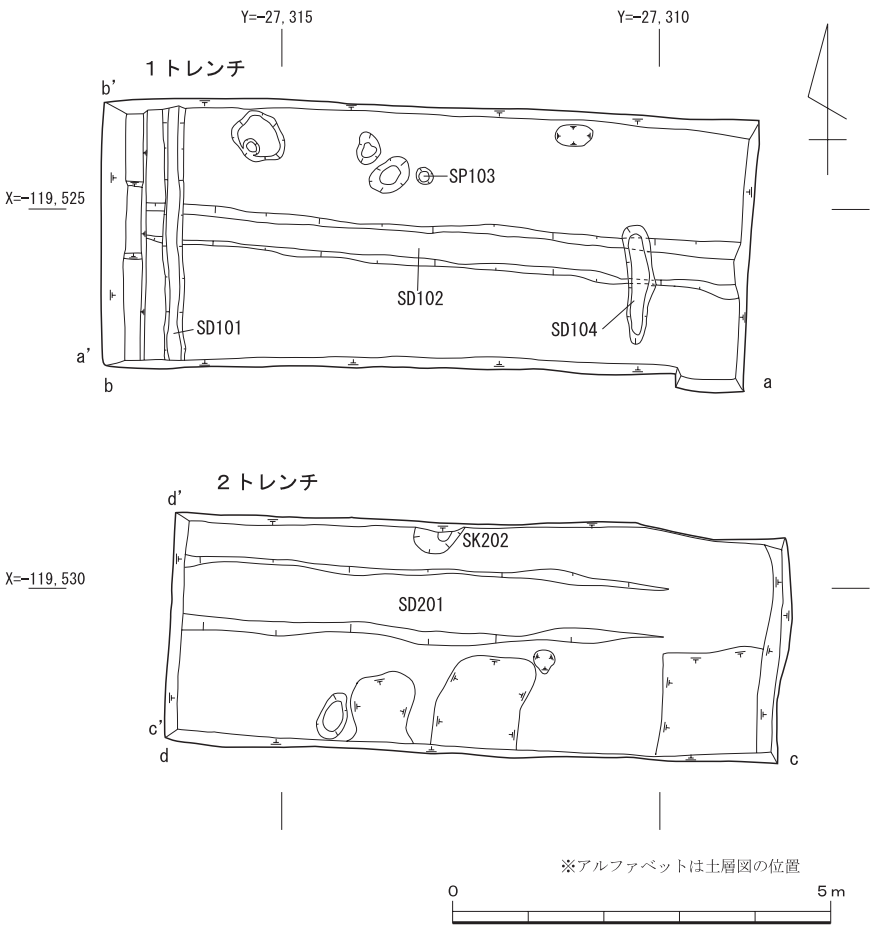
溝ＳＤ101　調査区の西端で検出した南北方向の溝である。ほぼ正方位を向く。検出面での溝幅は0.4m、残存深は0.07～0.09m、検出範囲での残存長は3.3mを測る。調査区東端付近に同一方向の溝状遺構の残欠（ＳＤ104）があり、互いの心々間はおよそ6.1mを測る。ＳＤ102埋没後に掘削されている。遺構埋土は直上に堆積する第５層の灰黄褐色砂質土



第２図　トレンチ配置図

であり、遺物は出土していない。

溝ＳＤ102　調査区の中央を東西に横断する溝である。検出面での溝幅は0.5～0.7m、残存深は0.3～0.5m、検出範囲での残存長は8.1mを測る。断面は逆台形を呈し、一様ではないが西側が東側に比して溝底の標高が低くなっている。主軸は西でやや北に振れている。溝底に暗オリーブ褐色砂質土(第４図第６層)が厚く堆積していたが、明黄褐色砂質土が混入する暗灰黄色砂質土で短期間に埋没したようである。近世以降の陶磁器類が出土している。



第３図　１・２トレンチ遺構配置図

柱穴ＳＰ103　調査区中央の北よりの地点で検出した。直径0.2m前後を測り、深さは0.1mほどを残す。摩滅の著しい土師器の細片が出土しているが、器種、時期等は不明である。

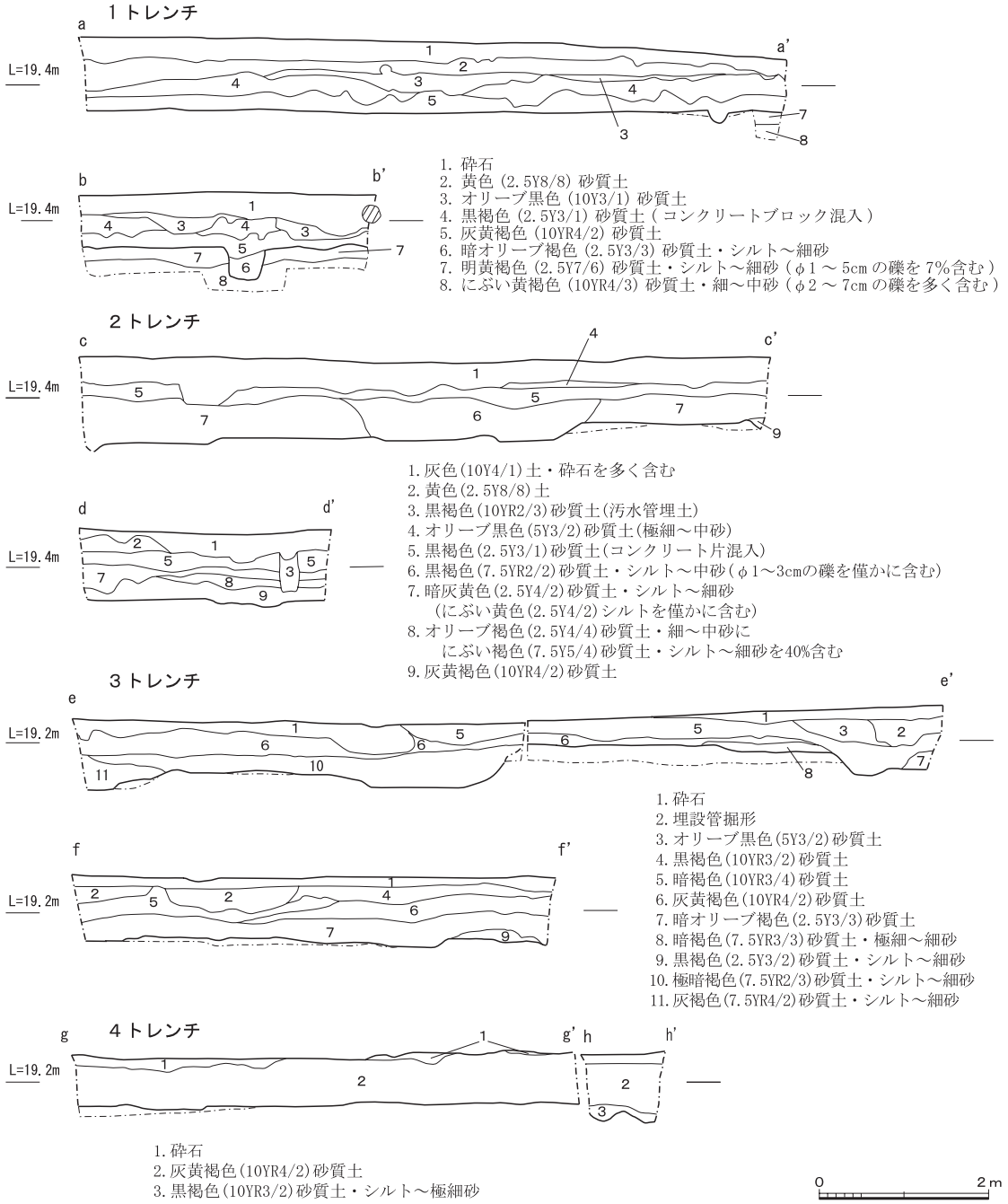
（２）２トレンチ(第３・４図)　１トレンチの南側に隣接して設定した。本来ならば１トレンチと一体で調査することが望ましい地点であったが、個人住宅居住者の往来を確保するためと、中央に上下水道が東西方向に埋設されていること等から、分割して行わざるを得なかった。調査面積は26㎡である。当地点も１トレンチと同様の層序となっていた。第７層までが既存施設の撤去工事等に伴う堆積であり、遺構検出は地山面で行った。調査区南半は大きく攪乱を受けており、検出できた遺構も僅かに溝１条と土坑２基であった。

溝ＳＤ201　調査区の中央を東西に横断する溝である。検出面での溝幅は0.6～1.0m、残存深は0.1m前後、検出範囲での残存長は6.4mをそれぞれ測る。大きく削平を受けており、東端では徐々に浅くなり消滅している。埋土は灰黄褐色砂質土の単純一層である。近世以降の遺物が僅かに出土している。

土坑ＳＫ202　調査区北端の中央付近で検出した。北半は調査区外へと広がるため、全容は不明である。東西0.65m、南北0.4m以上、深さ0.45mをそれぞれ測る。遺物は出土せず、遺構の時期・

性格等は不明である。

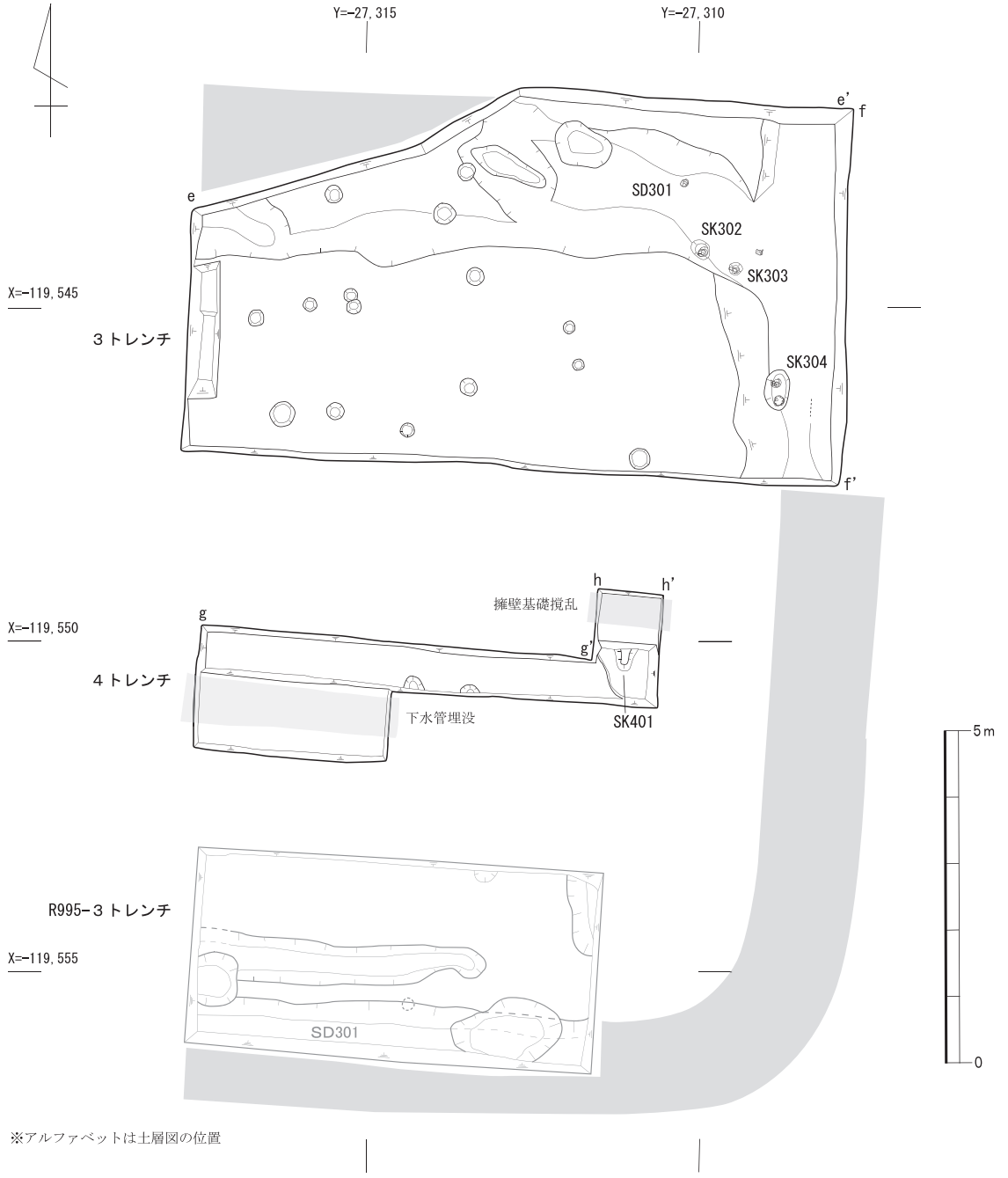
（３）３トレンチ（第４～６図）　集合住宅居住者の通路を確保するため、２トレンチの南側におよそ10mの余地を残して設定した。当地区は直近まで駐車場として利用されており、深く基礎工事を要する構築物は造られていなかったことから、遺構の検出が期待された。ガス管の埋設地点を避けたため、北西隅部を欠いた変則的な五角形となった。調査面積は53㎡である。第７層までは現代の攪乱であり、第８層が１・２トレンチでも確認した近世以降の遺物包含層である。調査はこの第８層まで重機により除去し、その後、人力による遺構精査を行った。遺構検出面は地山面である。遺構精査の結果、溝１条と柱穴15基を検出した。また、溝底からは土坑４基を検出し



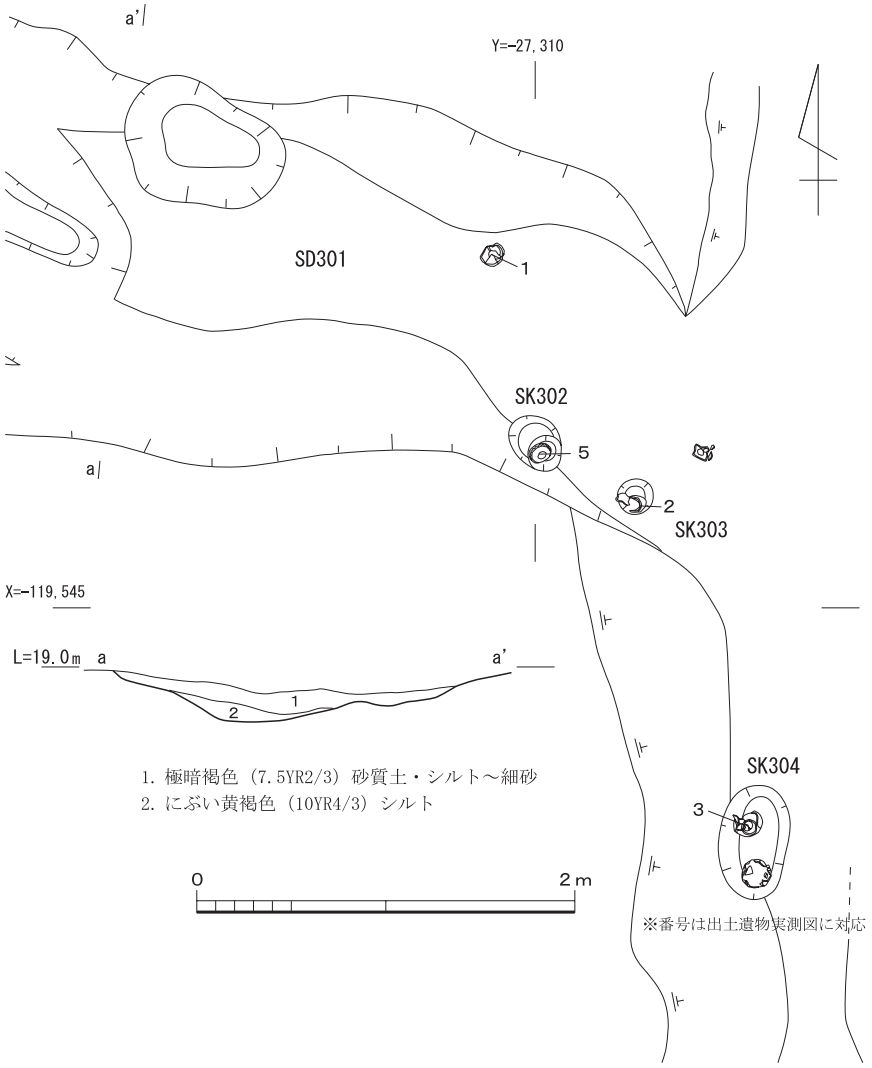
第４図　各トレンチ土層断面図

た。柱穴は直径0.2m～ 0.4mを測る。埋土はいずれも暗褐色砂質土の単純一層で、遺物は出土しておらず、時期等は不明である。ただし、溝の上面でもこれらの柱穴は検出されており、相対的な前後関係は捉えることができる。

溝ＳＤ301　調査区北端で検出した東西方向の溝である。軸線は東で南へ振れており、東端が僅かに南へと屈曲していく傾向が見て取れ、幅2.2m、残存長は8.5mを測る。東端で南へと屈曲した先は、後世に大きく削平を受けていたが、底付近は僅かに削平を免れており、調査区の南端まで延びていくことが確認できた。平成22年度に実施した右京第995次調査の３トレンチで検出



第５図　３・４トレンチ遺構配置図



第６図　溝ＳＤ301遺物出土状況図・土層断面図

されたＳＤ301と一体の遺構となる可能性が高いと判断され、この成果に基づくと、溝の心々間でおよそ14ｍを測る方墳に復元することができる。また、北辺のほぼ中央にあたる部分が、東西3.0ｍ、南北1.5ｍ以上の範囲で周辺よりも0.2～0.3ｍ程度であるが一段浅く掘り残されており、この部分が通路として機能していた可能性が考えられる。

土坑ＳＫ302　ＳＤ301東端が南へ屈曲した地点で、溝の埋土を掘削した後に検出した小型の土坑である。主軸が北で西へ振れる楕円形を呈し、長軸0.35ｍ、短軸0.25ｍ、深さ0.15ｍをそれぞれ測る。南西部を直径0.2ｍの柱穴状に深さ0.1ｍ程度二段掘りにしており、その部分に瑕がほぼ正位で据えられていた（第６図）。

土坑ＳＫ303　ＳＫ302の南東で検出した。直径0.2ｍを測り、深さ0.1ｍ程を残す。内部には、隙間なく土師器の小型鉢が正位で据えられていた（第６図）。

土坑ＳＫ304　調査区南東隅付近で検出した。長軸0.6ｍ、短軸0.4ｍを測る楕円形を呈し、深さ約0.1ｍを残す。この地点は大きく攪乱を受けていたが、ＳＫ304を検出した深さまではその掘削が及んでいなかった。削平を免れた土坑内からは、土器２個体が出土している（第６図）。そのうち一つは壺の下半と考えられるが、図示することはできなかった。

（４）４トレンチ（第４・５図）　３トレンチで方墳を確認したことから、埋葬施設の検出を目的に設定した。３トレンチとの間隙には、排水管が埋設されており、その南にはかつて敷地境界の擁壁が巡っていた。調査着手に先立つ擁壁基礎の撤去工事に立会い、それが遺構面よりも深く掘削されていることを確認していたので、その部分を避け、南側に設定することとした。掘削は人

力により行ったが、南側で新たに排水管の埋設を確認し、その部分の掘削は中止した。調査面積は10㎡である。１～３トレンチでも確認した灰黄褐色砂質土が地山面直上まで堆積していた。遺構精査を行った結果、柱穴２基と土坑１基を検出した。しかし、方墳の埋葬施設と考えられる遺構は調査範囲内では検出することができず、すでに削平を受けたものと考えられる。

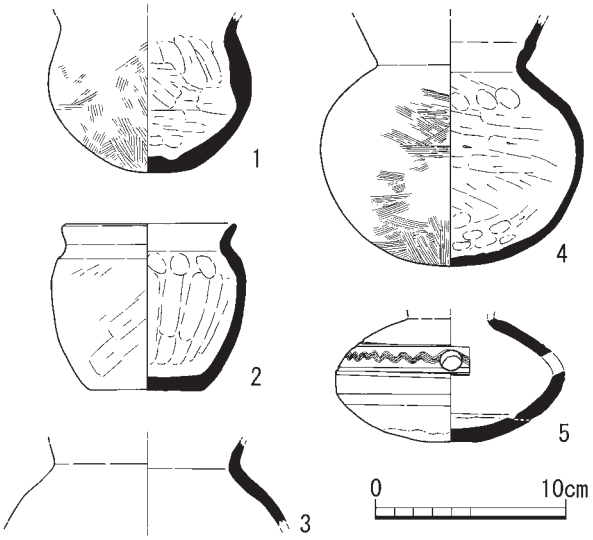
土坑ＳＫ401　調査区の東端で検出した。東西0.8m以上、南北0.7m以上、深さ0.1～0.2mをそれぞれ測るが、遺構の大半が調査区外へと広がっているため、全容は不明である。埋土は黒褐色砂質土の単純一層で、内部には掘り残した高まりが存在する。瓦器椀の細片が出土している。

３．出土遺物（第７図）

今回の調査で出土した遺物は、遺物コンテナにして２箱分である。１はＳＤ301を掘削中に出土した土師器の小型丸底壺である。口縁部を欠損し、体部は1/2が残るのみである。体部最大径は10.7cm、残存器高は8.3cmを測る。外面はハケ調整の後、粗いナデで調整されている。成形は粗雑で器壁の厚みも一定せず、内面には粗くナデ調整の痕跡が残る。２はＳＫ303から出土した土師器の小型鉢である。口縁部は一部を残してほとんどが欠損するが、体部は完存していた。口径は8.8cm、器高は8.9cmをそれぞれ測り、平底を呈する。口頸部はヨコナデ、体部外面はケズリの後、ナデ調整しており、体部内面は丁寧にナデ調整されている。３はＳＫ304から出土した土師器の壺である。口縁端部を欠損し、体部はおよそ1/2が残存する。体部最大径はほぼ中位にあり、13.9cmを測る。体部外面はハケ、内面はケズリによる調整である。４はＳＤ301を掘削中に出土した土師器の壺である。頸部から肩部にかけての一部が残存するのみである。摩滅により調整等は不明である。５はＳＫ302から出土した須恵器の瑕である。口頸部を欠損しているが、体部は完存する。算盤玉形を呈し、残存高は6.1cm、体部最大径は12.0cmを測る。肩部に２条の沈線を施し、その間に波状文を施文する。

４．まとめ

今回の調査は、府道の拡幅工事に先立ち４地点において実施した。１・２トレンチでは、後世の攪乱や削平を受けたことにより、地山面上で近世以降の溝を検出するに止まった。３トレンチにおいても同様に大きく削平を受けていたものの、調査区の北端において東西方向の溝１条を検出した。この溝ＳＤ301は東端で南へと屈曲して延びていくため、右京第995次調査の３トレンチで検出された溝ＳＤ301と一体の遺構になるものと判断した。その結果、一辺およそ14



第７図　出土遺物実測図

mに復元可能な方墳を新たに１基検出することとなった。しかし、墳丘に関しては、すでに削平を受けたためか、検出することはできなかった。４トレンチは、３トレンチで検出した方墳の埋葬施設の確認を目的に調査区を設定したが、中世の土坑を１基と柱穴２基を検出したのみで、墳丘と同様に埋葬施設についても検出することはできず､すでに消滅したものと判断される。また、今回の調査対象地は、長岡京右京六条一坊十六町に該当し、近接して実施された右京第863次調査では、六条条間小路の南北両側溝を検出するなど成果が得られているが、今回はいずれの調査区においても当該期の遺構を検出することはできなかった。現代までの土地利用の間に削平を受け、消滅したと考えられる。

今回の調査で検出した方墳は、開田古墳群東羅支群に属すると考えられる。当支群では、付表に示したとおりこれまでに11基が確認されており、それに新たな１基を追加する成果を得た。開田古墳群の基数は調査成果の蓄積により増加しており、その分布域も拡大傾向にある。開田古墳群の内容を整理する必要性は高まっており、複数支群の設定が適当とする見解(注5)も示されている。

（奈良康正）

注１　藤井　整「９．長岡京跡右京第750次（7ANMHK-6地区）・神足遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査報告概報』第107冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

注２　松井忠春・高野陽子「３．長岡京跡右京第781次（7ANKSM-11地区）・神足遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査報告概報』第112冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2004

注３　戸原和人「６．長岡京跡右京第863次（7ANKSM-15地区）・開田遺跡・神足遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査報告概報』第119冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2006

注４　村田和弘「３．長岡京跡右京第995次（7ANKSM-16地区）・開田遺跡・開田古墳群発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第142冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2011

注５　中島皆夫「右京第600次（7ANKYD-2地区）調査概報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成10年度　（財）長岡京市埋蔵文化財センター）　2000

付表　開田古墳群東羅支群一覧

長岡京跡調査次数等		所在地	時　代	備　考
R66	六条一坊九町	神足１丁目	古墳後期	一辺 16 mの方墳・周溝幅 1.5 ～ 2.0 m・須恵器
〃	〃	〃	古墳後期	一辺 11 mの方墳・周溝幅 1.0 ～ 2.0 m
R301	五条二坊三町	開田２丁目	古墳後期	径 10.5 mの円墳・周溝幅 0.9 ～ 1.6 m
R398	六条一坊十六町	〃	古墳中期	一辺 10.5 m以上の方墳・周溝幅 0.9 ～ 1.6 m
〃	〃	〃	不明	規模不明・方墳・周溝幅 1.0 m・須恵器
R490	五条一坊十一・十四町	馬場１丁目	古墳後期	径 13 mの円墳、または一辺 12 mの方墳・須恵器・埴輪
R496	五条一坊十三町	開田１丁目	古墳後期	一辺６m以上の方墳・周溝幅 1.8 m・埴輪
R554	五条二坊四町	開田１丁目	不明	規模不明・円墳・周溝幅 0.5 ～ 0.8 m
R618	五条一坊十二町	馬場１丁目	不明	規模不明・埴輪
R669	六条一坊九町	一里塚２丁目	古墳後期	規模不明・方墳・周溝幅 3.0 m・埴輪・古墳群内に土壙墓あり
R995	六条一坊十五町	開田２丁目	古墳中期	一辺 12 mの方墳・須恵器

※『長岡京市遺跡地図〔第５版〕』（平成18年２月）遺跡地名表を一部改変・追加

(1) 1 トレンチ遺構検出状況
（東から）

(2) 1 トレンチ完掘状況（東から）

(3) 1 トレンチ西壁土層断面
（東から）

(1) ２トレンチ遺構検出状況
（東から）

(2) ２トレンチ完掘状況（東から）

(3) ２トレンチ西壁土層断面
（東から）

(1) 3 トレンチ遺構検出状況
（南から）

(2) 3 トレンチ北壁土層断面
（南から）

(3) 3 トレンチ東壁土層断面
（西から）

(1) ３トレンチ完掘状況(南東から)

(2) ３トレンチＳＤ301土層断面
(東から)

(3) ３トレンチＳＤ301北辺中央
掘り残し部分(東から)

(1) ３トレンチＳＫ302
遺物出土状況（北西から）

(2) ３トレンチＳＫ303
遺物出土状況（北西から）

(3) ３トレンチＳＫ304
遺物出土状況（東から）

(1) 4 トレンチ完掘状況(西から)

(2) 4 トレンチＳＫ401土層断面
(南から)

(3)出土遺物

京都府遺跡調査報告集 第149冊

平成24年３月31日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三 星 商 事 印 刷 株 式 会 社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141